

第一話 一年後

もうすぐ冬も終わろうという二月下旬。

「うつ、ぐすつ、ふええ……」

「……………(スマホをいじっている)」

都内の、とあるログハウス風の喫茶店。

その店内の窓際の席で、向かい合って座る男女二人。

「ふああああ、ひぐつ、うぐう……」

「……………(LINE から通知が来たらしい)」

まるで別れ話がつれたかのように、みつともなくすすり泣いているのは男の方で。

そして女は、そんな男の態度を心底どうしてもよさそうに、手元の携帯端末がもたらす情報の収集に余念がない。

そんな、付き合ってはみたものの、男の甲斐性のなさのせいでとつくに冷めてしまったような倦怠期気味の二人とは……

「って、恵いいい〜、お前も一緒に喜んでくれよおおお〜」

「あ〜、うん、おめでとう倫也(ともや)くん」

もちろん、この作品(冴えカノ)内で描写している以上、それが見知らぬ男女な訳もなく。

「だ〜か〜らあああ〜、なんでいつも通りの投げやり対応なんだよおおお〜、これは凄いことなんだぞ〜」

「でもわたし、去年とつくに合格してるし、同じ大学に」

「それを言っちゃおしまいでしょおおお〜!？」

不死川(ふしかわ)大学文学部一年生、加藤(かとう)恵。

そして本日、めでたく同じ不死川大学文学部への入学が決まった、元浪人生の安芸(あき)倫也。

……なお卒業後の二人の進路がこのように一年ずれた経緯についてどうしても気になる方は、原作一三巻にそこそこ詳しく書いてあるので参照願います。

「だいたい恵さあ、俺が味わったこの一年間の地獄の辛さわかってる？」

「そんなに辛そうだったっけ？ ほぼ毎日会ってたけど、言うほど猛勉強してる雰囲気なかったし、目を離すとすぐマンガやアニメに逃避してたし」

「そういう表に見える部分だけで安易に判断するのはどうかと思うんだよ俺は！」

と、まあ、それはともかく。

この、一年前、私立豊ヶ崎学園を卒業した同じく一九歳の二人は、それから一年間の近距離、遠格差恋愛期間を経て、ようやく同じキャンパスで毎日逢瀬を重ねるらぶらぶカップルへと成長を遂げたのである。

「だって、ほら、結局 去年一年間サークル活動休止してたし、しかも恵に負い目あるし！」

「おととしの高三の時に活動休止してれば、負い目の方はなかったかもね？」

まあ、相変わらず、とてもそうは見えないというのは置いておくとして。

「わかってない！全然わかってないぞ恵！もしおとし、俺たちが活動休止して二本目のゲームを作らずそのまま卒業してたら、俺たち、こうして一緒にいられなかったかもしれないじゃん！」

「ん〜、どうだろ？もしそうだったとしても、一緒にいられたと思うけどなあ」

「そう思えるのって、今俺たちが付き合ってるからじゃん。あの頃の恵が俺を選んでくれるかなんて怪しいじゃん」

「そっかなあ？これっぽっちも怪しくないと思うんだけどなあ……二年前、だったらさ」と、表情からではそうは見えなくても、その言葉の意味を解釈すると、あからさまにそうは

聞こえる恵のキラークラスを……

「いやいやいや、やっぱ高三の時に俺たちがあんなだったのって、俺が受験ほっぽってゲーム作ってたからじゃん！」

「……そういう、わたしが倫也くんを墮落(浪人)させたような言い方やめてほしんだけど」単なる、急に来たボール扱いで華麗にスルーするだけならいざ知らず……

「そうは言ってもさ、あの時、本当に色々あったじゃん」

「まあ、それは……」

「メインヒロインのシナリオで行き詰まって、恵と一緒に色んな展開考えて、考えるだけじゃなくて実際に再現してみたりさ……」

「あ、あれは、その……そこ思い出さなくてもいいと思うんだけどなあ」

「で、そしたら紅坂さんが倒れて、俺がサークルを一時離脱して、恵に、もう終わりだって勢いで泣かれて……」

「……………いや本当そこ思い出さなくていいと思うんだけど。というかそれを蒸し返すならわたしも色々溜め込んでたもの出しちゃってもいいよね？ 倫也くんあれで二度目だったよね裏切り？ 前の時あんなに一生懸命謝ってたのにまったく改めてなかったよね？ 基本わたしのことなんかどうとでもなるって思ってるってことだよな？ それって本来は許せることじゃないって思うんだけどなあ」

「ああああああああっ！ ごめんなさいごめんなさいごめんなさいいいい〜！」

こうして、最悪のカウンターを食らうという結果を招くところなんかは、倫也の男……と
というか彼氏としての器の、まるで成長してない感をまざまざと見せつけていたりして。

※

※

※

「とにもかくにも、これにてめでたく『blessing software』再開だ！」

「あ〜はいはい、よかったね〜」

喫茶店を出た頃には、もともと短い昼の陽光は、そろそろ終わりが見えたかのように朱色へと変わっていて。

いつもの、安芸家へと帰る途中の(天〇の子にも登場した)急な上り坂を、二人並んで仲睦まじく帰路に就く。

「そんなわけで今から合宿だ！ ミーティングするぞ恵！ もう一度、俺たちで、前作『冴えない彼女(ヒロイン)の育てかた』を超える最強の作品を作るんだ！」

「でも今さら同人のテキストアドベンチャーって市場的にどうなの？ 商業メーカーでさえどんどん撤退していつてるのに」

「やめやめやめっ！ そういう冷静な分析やめえええ〜い！」

まあ会話の内容はともかく。

「で、でもまあ、恵の言うことも一理ある……だから、そこをどうするかも含めて企画を練ろう」

「ゲームのジャンル、変えるの？」

「何もかも最初から考え直すってことだよ……そもそも今だと、パソコンやゲーム機じゃなくてスマホって選択肢もあるし」

「そうだね。『う〇わ〇』だってソシャゲに移行したしね」

「だからそういう分析やめろって言ってるでしょ〜！」

いや本当、会話の内容はともかく。

「あ、あとはほら、グラフィックだって……静止画にとどまらず、3D化とか2Dモーフィングとかで表現の幅を拓ける必要が出てきたりするかもしれない」

「それ、出海ちゃんが大変なことにならないかな？」

「だったら、ゲームにこだわる必要だってない……それこそアニメとか、いや、実写だっていい」

「でもそこまで行っちゃうと、同人じゃ限界が……」

「ああ、全部考え直すって言っただろ？」

「それって、もしかして」

「うん、同人か、商業か……俺が、これからどこまでの高みを目指すのかも含めて、だ」

「……そこまで、考えてるんだ」

そんな、散々あれな会話を経たにもかかわらず、そこそこ真剣な倫也の思いに触れ。

恵は、眩しそうに、自分の恋人の横顔を見上げる。

その視線の高さは、初めて背伸びをして合わせたときと比べて、ほんの少しだけ高くなっているような気もして。

今だと、少し屈んでもらわたいといけないかもしれぬなんて、余計な心配もしたりして

「そりや、好きなものを作るっていうのは大前提だけど、たくさんの人に届くことが大事だつてのもわかるようになったからな」

「だいぶ波島君から悪い影響を受けてるみたいだね」

「……恵？」

まあ、そういう『フラットじゃない』気持ちは、意地でも言動に反映しないけれど。

「でも、そうだね……英梨々も、霞ヶ丘先輩も、遠くに行つちやつたもんね」

「うん……二人に追い付くには、俺たちも色々な場所で戦っていくしかない」

澤村英梨々と 霞ヶ丘詩羽。

すなわち、柏木エリと霞詩子。

もともと、人気も実績も十分にあつた二人のクリエイターは。

けれど一年前に発売された人気 RPG シリーズ最新作『フィールズクロニクル XIII』によって、その知名度は爆上げとなり。

さらに、半年ほど前に再びコンビを組んだ新作小説『世界で一番大切な、私のものじゃない君へ』は、発売以降、今までとは異なる客層に爆発的にヒットし、重版に重版を重ね、つい先だって映画化が発表され。

そんな、今となつては『ちよつと前まで一緒にサークルやつてたんだ』なんて事実に基づいた言葉でさえ、ただの売名行為ととられてしまうくらいに、雲の上の、さらに成層圏を突き抜け太陽系を超えたくらいに遠い存在になっ

「これからは……いや、今までもそうだったけど。もつともつと見栄を張る。でつかいチャレンジをする。めちゃくちゃ無理をする」

「確かに、今まで以上にブラックなこと言ってるね」

「でなきゃ、俺みたいな一般人、すぐに消え去るし」

「倫也くんを一般人って言いきっちゃうのは色々と問題があるような……」

「もちろん、自分の力だけを頼りに一人で突っ走ったりしない。出海ちゃんや、美智留や、伊織や、恵の力を借りまくる。必要なら、もっと他の人も引きずり込む」

「あー、やっぱりわたしたちも、そのブラック職場に巻き込まれるんだ」

「あの二人に追いつくためには、なんでもやる。変わってみせる」

「……ふう」

恵がどれだけ茶々を入れても、一度変なスイッチが入ってしまった倫也は、やっぱり今ま

で通り、止まる気配がなくて。

意味もなく熱くて、馬鹿みたいに純粋で、鼻につくほど押しつけがましくて。

「変わってみせる、けど……一つだけ、絶対に、変えないことがある」

「そねって？」

けれど、今や倫也のことを特別な目で見ることはできなくなってしまった恵は、そんだ暑苦しい彼氏を昔みたいに『はいはい、凄いな〜』と低血圧でスルーしきれず。

だから、少しだけ困ったような表情を浮かべ、ため息をつき、心の中でそれほど困っていない自分に『もう、しょうがないなあ、わたし』と悪態をつく。

「胸がキュンキュンする、メインヒロインを、これからも追い求めてレク」

「……………あ〜」

それでも、やっぱりその、自分以外をドン引きさせるに十分な、なかなかしょうもない思考回路を全肯定するのは、なかなか骨の折れる作業ではあった。

「もう、ゲームにはこだわらない。

俺がこだわるのは、俺の好きなものを好きなように表現するってことだけだ」

「ジャンルだってこだわらない。

『cherry blessing』みたいに、また伝奇やってもいいし、SF だってアクションだってホラーだっていい」

「けれど、どの媒体だって、どのジャンルだって……

必ず、ヒロインを、魅力的に描くことに、一番心血を注ぐ」

「誰もが、好きになって……

彼女にしたいって、嫁にしたいって、家族にしたいって、思える……

そんなメインヒロインを、一生追い求めていく」

その、倫也の、相変わらずキモい宣言を真正面から受けた恵は……

「でもそういうのを作り続けるのって、“童貞力”ってやつが必要だって霞ヶ丘先輩が言ってたよ？ 今の倫也くんにはできるのかなあ？」

かつての自分からでは思いもよらないほどの意味深な毒を塗った言葉のナイフで、今や自分のせいでその力を失ったはずの恋人の背中をぶっ刺した。

「おまっ！ 恵っ！ なんてこと言うのなんてこと言うんだよそういう言葉ヒロインが使っちゃ駄目でしょ！」

で、刺された倫也の方は、“お前”呼びが不適切と気づき慌てて呼称を名前呼びに変えつつも、そのあんまりな衝撃までは修正しきれず、今までで一番甲高いツッコミの声を上げた。

「えっと、なんでも創作っていうものは、自分がなれなかったり、手に入れられなかったことに対する欲望や妄想や闇を表に出すことで傑作が生まれるんだって、霞ヶ丘先輩が……」

「……お前『詩羽先輩が言ってた』ってことにすれば何でも許されるって思ってるだろ？」

もう気を使うのにも疲れた倫也は、今まで通り投げやりにお前呼びしつつ、それでもまだ最後の力を振り絞ってもう一度詭弁、いや熱弁を振るうべく拳を振り上げる。

「いいか恵？ 元医師が書いた医療漫画とか、元銀行員が書いた金融小説とか、元製造業の社員が書いたラブコメとかさ、その業界にいる人間が、自分の体験をもとに傑作を作り

上げた例なんて枚挙に暇がないだろ！」

「えつと、最後のは……？」

「だから、だからだな……たとえ、めつちやくちゃ可愛くて、すつげえ大好きな彼女がいたとしてもっ！」

「うぁ……」

「フィクションで、現実以上のイチャイチャ、ラブラブなシーンが表現できないことがあるのか！ そうだろうそう思うだろう恵!？」

「え、え〜と……ごめん倫也くん、もう少し音量と表現抑えて」

せっかく背中を刺して血圧を下げたにもかかわらず、倫也のボルテージは一向に収まる気配がなく。

おかげで恵の方の血圧が、代わりに微妙に上がってしまったりして。

まあ、それが羞恥かそれ以外の感情かはともかくとして。

「俺の妄想と、恵のリアルを掛け合わせて、今までにない最強オブ最強のヒロインを作り上げようぜ！ そう、これは妄想と現実との勝負じゃない、コラボレーションだ。今までの妄想と、今までの画の両方を、はるかに凌駕するための戦いだ！」

「でも、今までの現実が追い抜かれるってことは、わたしが追い抜かれるってことだよな？ それって負け犬っぽくないかな？」

「だからこそ今まで以上に努力するんだ恵！ さらに素敵な彼女に！ 史上最強のヒロインに！」

「え〜、わたしだけ頑張るのって、なんか納得いかないよ」

「仕方ないだろメインヒロインなんだから！」

そして恵は、こんな馬鹿げた会話に転がされてしまっている自分が少し腹立たしくなったのか……

「でもさ、メインヒロインに頑張って欲しいなら、主人公だって頑張るべきだと思うんだけどなあ」

「……え？」

「倫也くんにも、新しい主人公に負けないように、今まで以上に魅力的になってもらわないと、納得いかないんだけどなあ」

今まで倫也がさんざん自分にしてきた無茶振りの言葉を、拗ねた声音で絞り出す。

「俺……？」

「うん」

「主人公？」

「そう」

「い、いや、けど俺は、創作の方では頑張るけど、別に胸がキュンキュンするような主人公を目指してる訳じゃ……」

「でも、メインヒロインとしてはさ、主人公が魅力的じゃないのに、完璧を目指す理由が見当たらないよ」

「そんな藤○(さき)詩○(おり)じゃあるまいし！」

そして、今まで倫也がさんざん自分にしてきたように、図々しくも距離を詰める。

「ついてきて欲しいなら、ちゃんと口説いてよ、ここで」

「め、恵……」

「そんなブラック職場にわたしを巻き込むには、まだ、主人公の魅力度が足りない……」

あと一歩で、直接触れあつてしまえる距離までも。

「わたしは、ここでしたよ？」
さらに、もう、半歩。
「二年前(原作七巻)にも、一年前(原作一三巻)にも、したよ？」
ついでに、もう、四分の一步。
「そろそろ、ヒロインを超えるときだよ？ 倫也くん」
もう完全に、息がかかるくらいの距離で。
「一度くらい、ヒロインの胸がキュンキュンするような、主人公になつてよ」
触れてしまつても、一向に構わないというくらいの距離で。

「いや、その……さすがに、ヒロインを超えるなんてのは、無理だって」
「……」
「魅力度が足りないっていうのもその通りで、その点に関しては遺憾の意を示すしかない訳で」
「……………」
「で、でも……まあ、巻き込みたいなら、口説くしかないつてのは、確かに、その通りで……」
「ん」
どれだけ言い訳や泣き言を並べたところで、最後には腹を括るしかないというのは、倫也には長年の経験から骨身に染みていて。
何しろ、一度押しにきた恵は、その代名詞であるフラットさを表面上は残しつつも、けれど一步も引かず、ただ無言のまま求めてくるから。
特に、恋人の本音を引き出そうとする際には……
「え、えっと……『blessing software』の安芸倫也です。主人公役、やらせていただきます」
「お願いします」
という訳で、まずは作法にのっとり、自己紹介と、役名から。
そして、一つの咳払いと、一つの深呼吸を経て……

「俺こは、夢しかないけれど。
分不相応な、夢しかないけれど……
いよいよ、運命のオーディションが始まった。
「だから、たくさん失敗すると思うし、
色々、大変な目に遭うと思うし、
その騒動に、周りの人間を巻き込んでしまうと思う」

「それでも俺は、何が起きても、絶対に諦めない。
……いや、確かに今までは結構諦めたこともあったけど。
でも、恵の前でなら、見栄を張れる。やせ我慢できる」

「そりゃ、甘えるし、許しを請うことだって絶対たくさんあるけれど、それでも、恵の笑顔とか真顔とか、そういうのを見れたら頑張れる。もっともっと魅力的になった恵になら、思いつきり騙される」

「だから恵……」

お前は、もつともつと、魅力的なヒロインになつてくれ。
そして、俺を、主人公にしてくれ」
「成功したら、みんなで笑いあう。
失敗したら、みんなで這い上がる。
そんな主人公にしてくれ。
……カッコいい、主人公にしてくれ」

「つ……、以上です！ ありがとうございますっ！ はあっ、はあっ、はあああ〜っ！」
その、所要時間にして三〇秒にも満たない、短めのオーディションが終わると……
倫也は、まるで何分も、いや下手すれば何時間も演じ続けてきたかのように、荒い息を吐く。
「は、は、は……恥ずかしいiiiiii〜！」
そして、何時間も辱めを受け続けていたかのように、真っ赤な表情で顔を覆う。
「終わってからがカッコ悪いよ……」
「そ、そこはオーディションに含まれないだろ〜」

もちろんその無様な仕草は、審査員には非常に受けが悪くて。

「あと、逃げたよね？ 結局、わたしに頑張れって言ってるだけだよね？」
「そ、それは、えっと……そうかも」
「それに、結局ブラック職場をどうするかも言ってないよね？ 個人の努力でなんとかしようとしてるよね？」
「そ、そこは、えっと……これから考えるから」
それどころか審査員は、その提案の内容に関しても辛辣で。
「はああああ……あ〜あ、なんだかなあ」
「……怒った？」
「うん、怒った」
「悪い」

さらに審査員は、いつものお得意のフレーズが出るくらいに呆れ果てているようで。
だから下を向き、一つの深いため息を経て……

「……帰ろ」
「え？」
「早く、倫也くんの家に帰ろ」
「倫也の背中を押し、ぐいぐいと坂を上っていく」
「い、いや、帰る前に、コンビニで買い出しを……」
「いいから、そんなの」

……倫也と、同じ顔色になりながら。

「な、なんでそんなに急いで家に帰りたがるんだよ？」
「だって、ここじゃ人に見られるから、やだよ」
「何を！？ お前何するつもりなの！」
「あ〜いつもいつも、そういうツツコミはもういいから。どうせ同じ気持ちになってるくせに、いちいち言い訳がましいんだよなあ倫也くんは」
だって、いつも以上の、精いっぱい背伸びをするには、まだ明るいから。
「で、でも今日、ウチ親いるよ？ 四人で一緒に合格祝いしようってご馳走作って待ってるよ？」

「あ〜……うん、まあいいや、許可もらってるから」

「だから何の！？」

そんな、原作一三巻のラストとほぼ同じような展開を踏襲しつつ……

二人は、春から始まる新たな生活—と言いつつ、”まだ”同じキャンパスに通うだけ—に、思いを馳せる。

(了)